

現職教員に期待すること

伊藤隆文

(JICA 青年海外協力隊事務局長)

みなさんこんにちは。今ご紹介いただきました、JICAの青年海外協力隊事務局長をしております、伊藤でございます。本日ここにお集まりの平成23年度派遣青年海外協力隊78名、それから日系社会青年ボランティア6名、合計84名のみなさん。来年の4月上旬から、駒ヶ根・二本松の両訓練所、それから横浜国際センターにおいての派遣前の訓練・研修を受けていただくわけですが、それに先立ちまして、この特別研修の場を設定していただきました。この会合の設定にご尽力いただきました、文部科学省、それから筑波大学の方々に心から感謝を申し上げたいと思います。今年は、前回、非常に好評でありましたので、平成20年度1次隊で派遣されまして、今年の3月末に帰国された先輩の隊員のみなさまを中心としました報告会を同時に開催することにいたしました。これによって、先輩の経験が後輩の皆さまにきちんと受け継がれていくことを期待している次第であります。

先ほど筑波大学の佐藤先生からもお話をいただきましたけれど、青年海外協力隊は、1965年（昭和40年）に始まりまして、これまでに現在派遣中の数を含めると、35000人を超える隊員を派遣してきました。そして、現時点でも、約2600名の隊員が75カ国で活躍中であります。一方、日系社会青年ボランティアは、南米の日本人移住地を支援します、海外開発青年という制度を移しまして、1985年（昭和60年）に発足した制度でございます。その後、1996年（平成8年）のころに名称と内容を現在のものに変更致しまして、実施し続けております。

これまでに約1000名を派遣いたしまして、現時点では6つの国に79名を派遣中でございます。JICAのボランティア事業には、これ以外にシニア海外ボランティア、それから日系社会シニアボランティアがございまして、4つの制度を合わせると現時点で3400人を超える方々が世界77カ国で活躍をしておられます。現職教員の特別参加制度は2002年から開始されまして、この制度が始まる以前にも650名を超える現職教員の方が青年海外協力隊に参加された実績がございまして、けれども協力隊の場合、訓練も含めて2年3カ月という参加期間がありまして、学校の先生の場合には学年の変わり目に日本にいることが非常に重要であるという事で、この2年3カ月にすると現職での参加が難しいとのことで、派遣期間を1年9カ月ということにいたしまして、トータルで2年間の制度としたものでございます。この制度を作りまして以降、この9年間に約600名以上の教員の方々が派遣され、現在152名が50カ国で活躍中でございます。一昨年度からは、日系社会青年ボランティアの方にもこの現職教員の特別参加制度が拡充されまして、現在18名のボランティア

の方が、ブラジルを中心として、小学校教員として派遣中でございます。

JICA のボランティア事業には3つの目的がございます。1つは、開発途上国の経済・社会の発展に貢献するという目的でございます。それから2つ目は、開発途上国と日本との友好親善と相互理解を促進すること。それから3つ目が、ボランティアの経験を日本の社会に還元すること。この3つ目の、日本社会への還元。これが非常に重要な部分で、国の事業として国民の税金で賄われている理由がそこにあるといっても過言ではないと思います。教員のみなさんは、この社会還元という面でとても有利な立場にあると思います。つまり、帰国後再び教壇に立って子どもたちに自らの経験を語ることによって、日々の仕事の中で社会還元をすることになります。これは、ほかの職業にない大きなメリットだと思います。

我々JICA としましては、もっとたくさんの学校の先生方に、JICA のボランティアとして海外に出ていただきたいと考えています。また近年、日本の社会も変化致しまして、多くの外国人労働者が日本の経済を支える構造になってきております。その数は200万人とも言われております。そして、その子どもたちである外国籍の児童、これが7万人も、日本の公立の学校に就学しているとのこと。おそらく、ここにおられるみなさんが教壇に立っておられる学校でも、外国籍の子ども達が多かれ少なかれ在籍するのではないかと思います。まさに、日本の社会が異文化と共生する社会になってきたというふうに言えるかと思えます。

こういう状況において、豊富な海外経験を持ち、また異文化に対する深い理解を持ち、言葉を含めたコミュニケーション能力に長けた人材、こういうものを教育現場が必要としているのではないかと考えております。ここにおられるみなさんが、訓練も含めて2年間、協力隊員、あるいは日系青年ボランティアとしてチャレンジされれば、必ずこうした期待される人材になるものというふうに確信します。

これから出発されるみなさんには、どうか頑張っていたきたいと思えますし、昨年帰ってこられたみなさんは、すでにこうした人材として教育現場で活躍されているものと考えております。また、JICA としまして、「日本を元気にする JICA 海外ボランティア」というふうに銘打ちまして、日本の社会の中でボランティアの経験を生かして、地域の活性化や町おこし、村おこしに取り組んでいる協力隊の OB、OG、あるいはみなさんのように実際の教育現場で頑張っている協力隊の OB、OG を、積極的に取り上げて、「世の中にこういうふうに頑張っている人がいます」と発信することに取り組んでいます。帰国されたみなさんには、ご自身も含めて頑張っている仲間の情報を、JICA に提供していただきたいと思えます。

この特別研修の目的のひとつは、これから派遣されるみなさんに対する、支援のプログラムを紹介することにあります。筑波大学をはじめとする多くの大学による充実した支援体制が組まれております。協力隊のほかの職種では、これほど充実した支援の体制は見られないと言ってもいいと思えます。どうかこの厚い支援の体制を活用していただきたいと

いうふうに思います。JICA のボランティア事業は、ボランティア本人が主体であって、我々 JICA はこれをサポートさせていただくものであります。現地の活動の場面では、日本では想像できないような困難や苦労があるかもしれませんが、迷ったらぜひハードルの高い方にチャレンジするという精神で、頑張ってくださいと思います。

今日明日の二日間のこの研修が、みなさんにとって有意義なものになることを期待して、私からの御挨拶にさせていただきますと思います。有難うございました。